

<金融史パネル>

テーマ：近代移行期における貨幣と信用

—決済の視点から—

座長 法政大学 靄見 誠良

パネルの主旨

歴史的に見ると、交換手段、計算単位、価値保蔵手段としての貨幣の機能は、時代や地域によって、さまざまな様相を示してきた。本パネル報告では、市場取引の媒介物としての貨幣の機能について、経済取引の決済に着目しつつ、近代移行期における社会内部での貨幣と信用の利用実態に即して検討することとしたい。

大胆に整理すれば、近世以前の社会においては、複数の貨幣が重層的に流通していた。取引の当事者たちは、交換手段として複数の貨幣を取引の局面や相手ごとに使い分けていた。経済取引の決済を行うための交換ないし支払手段としての貨幣は不足しがちで、これを商人・金融業者の信用や分権的な貨幣発行によって補ってきたほか、実物貨幣としては存在せず専ら計算単位としてのみ使用される「計算貨幣」を使用することもあった。近世の社会においては、貨幣と信用の提供を業とする金融業者が商人から独立した業態として成立しつつあったが、商人から完全には分化していなかった。この間の状況については日本でも多くの古典的研究が存在するほか、近年、商品流通に即した研究が進展しつつある。

これに対し、近代の社会においては、特定の地域内部で流通する貨幣は単一の体系に統一され、取引の当事者は、上記3つの機能を併せ持つ単一体系の貨幣（多くの場合、国民通貨）を使用することが想定されてきた。また、中央銀行—民間銀行のネットワークを通じた専業の銀行による貨幣と信用の提供が行われてきた。

しかしながら、前近代から近代への移行期において、貨幣と信用の利用実態がどのように変容したかについては、先行研究によってもなお実態把握が必ずしも進んでおらず、近世と近代をつなぐ研究の進展が待たれる。本パネルでは、こうした問題意識に立って、日本ならびにその比較対象としての中国を中心に、近代社会への移行期における貨幣と信用の利用実態について検討することとしたい。